



誠意が通じた中曽根首相の「手作り」外交

長谷川 和年(研究顧問)

誠意が通じた中曽根首相の「手作り」外交

1

私は1982年11月から4年間、中曽根首相に安全保障と外交担当の秘書官としてお仕えした。

中曽根さんは、「自分の外交は手作りの外交だ」としばしば仰っておられ、私は傍でこれを見聞する機会があった。その「手作りの外交」の数例を紹介したい。

外国の元首または行政府の長と中曽根さんの会談の発言資料などは、外務省が中心となって作成する。中曽根さんは国際関係に関する自分の信念と見識を加味して、これら資料を利用して先方と会談されるのだが、「手作り」とは、会談を含めた先方の接遇全般に関して、中曽根個人の発意にもとづく（従って、官僚的でない）行事、色彩を加えることである。

結果は見事なものであった。中曽根個人に対する先方の理解、友情を深めたのみならず、日本国、日本人に対する先方の信頼、友愛感を醸成するのに大変役にたった。以下、幾つかの例をあげる。

1 韓国訪問（1983年1月）

従来、日本の首相は就任後まず米国を訪問するのが通例であったが、中曽根は重要な隣国である韓国をまずおとずれた。中曽根は、韓国で行った公式演説の始めの部分と終末の部分（合わせて全体の約4分の1ぐらい）を韓国語で行った。公式演説の場合、日本語で行い、これを当方の通訳が現地語に訳すのが通例であるが、中曽根は韓国語で入り、韓国語で終わったのである。会場に臨席した韓国の方々にとっては、これは予期しない大きな驚きであった。私は来賓席にいたが、韓国の方々は、啞然とし、同時に大変な喜びの面持ちであった。そのうちに一人の老婦人が、感激のあまり落涙し始めた。同時に、他の何人かの方々もハンカチを出して、涙を抑えておられた。韓国の方々にとっては全く予想外の感激的な事態だったのであろう。

誇り高い韓国の人々は、この中曽根の態度を極めて高く評価した。（私の友人の或る韓国の政治家は、「中曽根さんに韓国の首相を兼任してもらいたい」と言った程である）

中曽根さんは、今までに来日する韓国の政、財界の要人と会ったが、皆、日本語、しかも綺麗な日本語に堪能だ。しかし、当方は全く韓国語ができず、これは恥だ、と言われて、首相になる前の行政管理庁長官時代から、韓国に駐在したことのある日本の新聞記者を師として、韓国語会話を習っていたとのことである。ソウルにおける公式演説は導入部と終わり

の部分合わせて全体の約4分の1を韓国語で行ったが、これは、外務省の 2
韓国語の専門家を煩わせて、事前に熱心に練習をした結果であった。

また、こういうこともあった。 訪韓翌日の夜、全大統領主催の歓迎
夕食会が青瓦台（大統領官邸）であったが、食後、先方よりお誘いがあり地下
の小部屋に案内された。 パーがあり、数名の楽士が音楽を奏でていた。 乾
杯した後、全大統領は、「知床旅情」を韓国語で唱って中曽根さんを歓迎した。
これに応じて中曽根さんは、韓国歌謡「ノーランシャツ・イブンサナイ」（黄色
いシャツの男）を韓国語で上手に唄った。と、そこで全大統領と中曽根首相が
全く自然に抱き合い、頬摺りをした。 その時、全さんは、「ナカソネサン オ
レ アンタニ ホレタヨ」とたどたどしい日本語で、言われた。

その部屋に居た日本人は桜内・日韓協力委員会会長と小生だけで、私は職掌
柄、つねに中曽根さんの直近に居るようにしていたので、全大統領のこのお言
葉は、はっきりと聞き、今でも耳朶にのこっている。 それまで不協和音が絶
えなかった日韓両国だったが、今ここで両国の首脳が胸襟を開いた。 感激の
一瞬であった。

これは、「手作り」の中曽根外交が先方に素直に伝わり、先方も同様に、
「手作り」で対応した好例であったと信じている。

以降、日韓両国関係は極めて友好的に推移した。

2 米国訪問（1983年1月） ロン・ヤス 関係

今は広く人口に膾炙している、日・米両国首脳はこの関係は、以下のよう
にして生まれた。

韓国訪問の10日後に、中曽根は第一回の訪米をされたが、この年の5
月のウィリアムズバーグ先進国首脳会議出席のために、再び訪米する予定が
控えていた。

私は中曽根首相に、来るサミットでは、レーガン（米）、サッチャー（英）、
コール（独）、トルドー（加）などの各首脳は、互いに旧知の仲で、ファースト・
ネーム・ベース（互いに、名を呼び合う仲）です。 会議の場でこれは重要
な与件です。 今回の訪米で、是非、レーガンさんと「俺・お前」の仲になっ
てくださいとお願いをした。

訪米翌日、レーガン大統領ご夫妻が、中曽根さんご夫妻および同行した
令嬢の美恵子さんを招いて、内輪の朝食会を開くことになっているので、その
場で、レーガンさんに、「自分をこれからヤスと呼んで欲しい。それから貴方を
ロンと呼んでいいか。」と仰ってくださいと中曽根さんをお願いをした。

さて翌日、朝食会に出席された中曽根さんは、帰られるなり、「長谷川
君、長谷川君！」と私を呼ばれ、「向こうから、自分をロンと呼んでくれ」と

私は、驚き且つ嬉しかった。これには以下の背景事情があったようである。ここは中曽根さんご自身の言葉を借りるのが良いと思う（中曽根康弘著「保守の遺言」角川 One テーマ 2 1 1 5 1 頁）

.....

ブッシュ副大統領が開いてくれた夕食会の席で私はこんな話をしたのである。

「今回の訪米に同行している次女的美恵子は、小学生だった11歳のとき、インディアナ州ミシガンシティのウインスキー氏のお宅にホームステイしました。高校時代には互いに一年間、娘を交換留学させました。ウインスキー家とは20年近い交流が続いています。今回の訪米に際しても、一家をあげて、わざわざワシントンまで駆けつけてくれて、一同抱き合って再会を喜びあったばかりです。

かつて、11歳の娘の美恵子をアメリカに送り出すとき、家内と「いつか総理大臣になって訪米する時が来たら、そのときは美恵子が通訳をやってくれるといいな」と夢見たものですが、その後20数年、政治家として家族とともに、幾山河を越え、風雪に耐えて、ここワシントンを訪れ、それが今、現実になって感無量です。国と国との関係も、個人の家庭の友情で結ばれて始めて強固になると思います。日本とアメリカの関係も、ウインスキー家と私の家との関係のように友情と信頼で築き上げたい。」

話の途中、私は不覚にも感情がこみ上げ、言葉を詰まらせてしまったが、傍らでその話を聞いていたブッシュ副大統領、シュルツ国務長官、ワインバーガー国防長官、ブロック通商代表部代表など、その場に居合わせた閣僚が目頭を押さえるというシーンがあった。翌朝、(この話を聞いて)レーガン大統領夫妻も、目に涙をうかべていたという旨を、シュルツ長官から聞かされた。心と心が通じたのだろう。それがレーガンの、「これからは、お互いをロン・ヤスと呼び合おう」という話になったのだと思う。」

.....

中曽根さんは、自分の英語で、とつとつと心情を吐露された。外国に在勤、ましてや留学などしたことのない中曽根さんは自学自習で英語を勉強され、一応、自分の意思を相手に通じられるまでになっていた。(なお、ブッシュ副大統領の夕食会は内輪の夕食会だったので、通訳は出席していなかった)

このロン・ヤス関係は中曽根首相の誠意、真心が先方に素直にうけとめられ、アメリカ側も誠意、真心で応えた素晴らしい出来事であった。

ロン・ヤス関係は、その後の日・米政治、経済関係で、どれほど日本に

有利に作用したかわからない。例えば、市場開放が米国の希望するスピードで進んでいない日本に対して、米国の閣議で、圧力をかけるべきだとの意見が出ると、レーガンさんは、「今、ヤスがその問題で努力している最中に、そんなことをすべきでない」といわれて、これを押さえたことなど、当時の関係者はよく知っている。(中曽根首相は、一層の市場開放を目的として、当時、「アクション・プログラム」を策定中であった。)

同年11月に、レーガン大統領が国賓として来日された。この時、大統領夫妻は中曽根さんの「日の出山荘」で1日をすごされた。日の出山荘は東京都下日の出村の旧農家で、山荘というよりは、山小屋と言ったほうがいいかも知れない。中曽根さんは、余暇を利用して、ここで、都会の喧騒を避け、読書をし、想を練るのを常としていた。近辺には、名所も旧跡もない。自然の緑の中の、中曽根さんの勉強部屋である。一国の元首をお迎えするような建物ではない。ここへ、レーガンさんご夫妻をお迎えして、囲炉裏端で歓談し、その後、昼食を差し上げるというのが、中曽根さんご夫妻の歓迎案であった。「そんな田舎家でいいのか」と案ずる声もあったが、自然の中の佇まいを、レーガンさんは喜ばれるだろうとの、中曽根さんの心からの歓迎を大統領夫妻は心から喜ばれて、寛いだ1日を過ごされた。

3 パキスタン訪問 (1984年 4月)

前年7月に、パキスタンのハク大統領が国賓として来日された際、中曽根首相は、心をこめて大統領ご夫妻を接遇した。総理官邸における公式晩餐会にくわえて、公邸で中曽根首相ご夫妻による家庭的な昼食会を催し、この場で寛いだ雰囲気のもとで心からの接待をした経緯がある。

日本の対南西アジア外交を更に推進するため、そして前年のハク大統領の日本訪問の答礼を兼ねて中曽根首相はパキスタンを公式訪問された。中曽根さんは、行政府の長であるが、ハク大統領は国家元首で格が上である。普通こういうことは絶対にないのであるが、ハクさんは、自分より一段下の中曽根さんを、同じ立場で誠心、誠意、接遇してくれた。通常は、その国が任命する「接遇委員」が外国の公式の賓客に同行してご案内するのであるが、中曽根さんに対しては、ハク大統領ご自身が全行程に同行して、接遇された。国際的にも全く前例がないことである。

大統領は敬虔な回教徒で、イスラム国家であるパキスタンの国民から圧倒的な支持をえていた。地方の大都市ラホール訪問、病院見学、植樹祭など全ての行事にハクさんは同行され、また案内された。自分達の尊敬するハク大統領の賓客ということで、行く先ざきで、万余の民衆が道をうずめて、“ジン

ダバード ナカソネ（中曽根万歳）“！”と歓呼の声を上げて、熱烈に中曽根さんを歓迎してくれた。中曽根さんがパキスタンを離れる前夜、宿舎にハクさんから箱が届けられた。開けてみると、中に、イスラム教及びイスラム文化に関する書籍が10数冊はあった。各冊の表紙裏に、ハク大統領の自筆で読後感が英語で書かれていた。

中曽根さんは、大統領と話をした際に、敬虔なイスラム教徒のハクさんに、イスラムについて、いろいろ教えを乞うたとのこと。それに応えてこれらの文献が届けられたようである。これは、誠意をもって対応した（大統領の前年の訪日時）中曽根さんに、先方も誠意をもって応えたのだと思う。

仏教徒と回教徒、その他、中曽根、ハクの間には表面的な違いは多、多あるが、ハクさんは、国際的な政治家、そして同じアジア人の中曽根を真に尊敬し、また兄のように慕っているとの印象を私は得た。

4 胡耀邦・中国共産党総書記の来日（1983年11月） 及び中曽根首相の中国訪問（1984年4月）

中曽根首相は、中国共産党は中国の国家の中核である。行政府である中国政府と良好な関係を維持することは必須であるが、同時に中国共産党とも常に相互理解関係を保たなければならない、と仰っておられた。このような信念の中曽根は、来日した胡総書記を誠意をもって大歓迎した。公邸で、中曽根さんの家族が胡さんの一家を歓待し、また、国会で胡さんに演説してもらった。これは中国人政治家では初めての出来事だった。

総理官邸で公式晩餐会が開かれたが、宴のなかばに、正席の胡総書記が席を立ち、杯を持って、日本人来客の間を献杯して周った！これは、官邸の正式宴会史上、空前の出来事である！これは、その場が如何に“アットホーム”であったかの証左である。

爾後、胡総書記は、最高の親日家になられた。これも、中曽根の心のこもった、「手作りの外交」の重要な成果である。

翌年、中曽根は訪中したが、胡さんは最高の歓待をしてくれた。その中には、私邸における胡さん一家による歓迎昼食会もあった。胡さんの、当時小学校高学年のお孫さんも参加していたが、学校で英語の会話も習っているとのことであったので、中曽根はこのお孫さんとやさしい英語で話しあった。帰国後、このお孫さんから、“中曽根のおじいちゃんへ”という書き出しで、総理官邸の中曽根宛に、何回か英語で手紙が来た。公務多忙な中曽根であったが、大変に喜び、自ら英語で書いた返書を出していた。

これは、中曽根の「手作りの外交」の周回的なひとつの事かもしれない

が、胡総書記の中曾根そして日本に対する友好観を増幅したことは疑いない。

5 おわりに

中曾根は、自らの外交手法を、しばしば、「手作りの外交」と評したが、これは既成観念にとらわれない、かつ豊かな個性を反映した外交手法であったと言えよう。霞ヶ関官僚の行政知識及び行政経験を評価し、これを活用したが、手法的には、旧来の「霞ヶ関外交」の枠に束縛されないものであった。

理念として、民主主義、自由主義を信奉し、すぐれた戦略観を有していたが、外交手法の基礎をなしていたのは、和魂洋才の人間性、高い教養と文明史観、そして、政治家としての至高の責任感とリーダーシップであった。

(了)

平成二十二年六月十日

長谷川和年